

兵庫県伊丹市大字 千僧の小字地名

千僧は、東に大鹿、西に昆陽という伊丹地域の大きな村に挟まれた形になっていて、それが西国街道という重要な街道で「結ばれている」という感じになっている。村域は、その東西をつらぬく西国街道に対して南北にのびている。北側に昆陽村の飛び地が多くあり、南端は反対に飛び地となって昆陽地先・御願塚地先に及んでいる。集落のあるあたりは、海拔 20～25m 微高地にあり、大坂城や尼崎港に入港する船まで見えたという地域であり、水利には苦勞した。水車が使われていた。昆陽大池・当地区今池を主に、昆陽井からも取水していた。

集落は西と東に分かれており、神社・寺もそれぞれ 2 つあった。昭和 22 年、国道 171 号線建設により、北側は、兵庫県が宅地造成をし、住宅(広畑地区)となった。集落の北東は、昭和 28 年に耕地整理され、形および地名が変わって、陸上自衛隊も設置された。

その南には、昭和 30 年伊丹で初めての中層コンクリート住宅団地が建設された。さらにその南には、国家公務員宿舎の団地がならんでいる。その後、中央部西端の「堂ノ前」も昆陽地区の「堂ノ前」と一緒に、昭和 36 年に耕地整理され、「堂ノ前住宅地」となっている。

今池が埋められ、浄水場、171 号線を挟んで南には市役所を中心とする官庁街となった。

道路は、北から 171 号線、旧西国街道、新しく市道「千僧・桜ヶ丘線」、そして県道寺本・伊丹線の 4 本の大きな道路が東西を横切っており、昆陽とは市道昆陽池・千僧線、大鹿とは県道昆陽池・緑地線により「区切られた形」となっている。今は住宅地・官庁が自衛隊、大団地・工場地をもつ、多面的な地区になり、昔の面影は旧西国街道に面する「天神社」や「両森田家」の家並みにわずかに残るのみとなった。

しかし、その名のとおり、歴史的な集落であったので、地名のいわれについても後記のように、いろいろと説がある。貞享 3 年(1686)から文政 6 年(1794)まで武蔵国忍(おし)藩の阿部領となったが、その前後は幕府領であった。(村高 307 石 2 升 5 合)

※千僧村は天平勝宝年間(749～757)部落を成す。創め千僧供養のありし地なるを以て村名と為せり。此の地千僧供養の事は行基紀州熊野浦よりの帰途靈夢を感得し、勅願に依り和同 6 年(713)千僧供養を修して猪名権現を祀れる也。是本村の起源として伝ふる所なるも、一説に千僧供養は昆陽寺開基式の大供養なりしといふ。寺院開基の供養とせば、和同 6 年は同寺草創の時より 21 年前に当たる故甚だ不審なり。また、本村の成立が天平勝宝年間也といふも行基は天平勝宝年間に死去せる僧にて、供養の事は其以前なると争ふ可らず。思ふに千僧供養は元明帝の御代にて寺院とは何等の交渉なく寺院は聖武帝の天平 5 年(733)端を開きて後ち大成せるものなるに依り、本村の開発は千僧供養の前後に起こりしなるべく、従って、村名の起源も伝説の如く千僧供養より附せられしものといふべし。因に寛徳元年(1044)後朱雀帝病を得られ上東門院に御療養在らせらゝや大坂四天王寺に壹僧供養の事あり。是千僧供養より 330 年後のことなるも此事ありてより自然に本村に於ける千僧供養の事世に伝わらざるに至る。又、行基が其身僧侶にして斯かる大供養を修せし上猪名権現即ち神を勧請せるを怪しむ者あらんが行基は我邦に於て神仏同体説を唱えし発頭人なれば「みじん」も怪しむに足らず。唯其の弊害甚だしきより遂に明治の聖代に至り全然神仏混淆を禁じられしものなり。(幕府領 公称高祖 299 石 税石石高 173 石) (川辺郡誌より)

千人の僧侶の供養が語源ならば、「先祖供養」ではないので、「せんぞう」とするのが正しくなってしまう。はたして「せんぞ」の読みは何時からなのか、研究価値がある。(23.池ノ上 安楽院 の項)

千僧の小字

1. 池の下(いけのした) 千僧1丁目

北側を「今池」、南を西国街道に面し、当千僧地区の西の入り口に当たる地区である。「首切地蔵があった。(これは悪人に「返り討ち」にあった碑の道標といわれている)」

文字どおり「今池の下」というところから、この地名が付けられたのであろう。今池の南西より、天神社西側より丸太・越塚・下越塚・堂ノ前へ分水する水路があり、これを宮入川という。地形的には高低差があるので、水稻の出来は良くなかった。池の南西に(水を満水にするための)ハネ板があった。

2. 堂ノ前(どうのまえ、どうまえ) 千僧2・5・6丁目

千僧地区の西端にあり、北側に西国街道がある。隣接の昆陽地区と複雑に入り組んでいたが、その「昆陽字堂ノ前」地区の一部と併せて、兵庫県が耕地整理をし、住宅地として開発された。1か所飛び地がある。

3. 下堂ノ前(しもどうのまえ、しもどうまえ) 千僧5・6丁目

「堂ノ前」の南にあり、複雑な形をした地区である。2か所飛び地がある。兵庫県が住宅地として開発した。当地区の半分は都市整備機構であり、一部南に未変更地区がある。当地区17番(千僧6丁目238)に小祠がある。以上の「堂ノ前」「下堂ノ前」は名のとおり何か「お堂・屋敷」等の宗教的なものがあつたと推測される。

前述「池ノ下」の西には「昆陽字鈴ヶ森」という地名があり、さらに「首切地蔵」もある。安楽院を守るため千人の僧兵がいたが、その千僧供養の地蔵かもしれない。

4. 越塚(こしつか、こしづか) 千僧2・5丁目

北に西国街道が通る。それに沿って宅地がある。南側は田地で高低差があり、水持ちの悪いカゴ田であった。

5. 下越塚(しもこしつか、しもこしづか) 千僧4・5丁目

大部分を千僧公団が占める。

6. 高町(たかまち) 千僧4・5丁目

医薬品の開発・製造会社の6割ほどの地域である。

7. 丸田・丸多(まるた) 千僧1・2丁目

西国街道の北にあり、それに沿って村社「天神社」および宅地があり、当地区の中心部である。神社の少し東に、「郷蔵ごうぐら」(村の年貢米や非常用の穀物を収めておく蔵)があった。今池東より当地区の一部・越塚・出口・下越塚・樋掛田へ分水している水路を牛馬川といい、農繁期には疲れるので、ここで汗を流してやっていた。堤防上の台地附近は渇水期には、水車で水を入れた。この千僧地区は比較的高い位置にあり、大坂城が望まれていた。また、尼崎に入港する船も見ることができた。

※天神社(千僧村の氏神)

昔、この辺りが千僧集落の西端であった。現在でも旧西国街道の北側にこんもりと茂った森がある。元明天皇の和同6年(713)に、行基法師熊野に詣で一夕神に見え、明日其の霊容を彫刻して此の地に帰り小社に遷して猪名権現として祀り、田・池・畑の開拓達成されたのを起源とする。永禄4年(1691)の石灯籠がある。初め大己貴命のみを祀っていたが、明治43年9月15日「池ノ上」にあった猪名神社を合祀した。(「伊丹の神社」より)

8. 水掻(みずかき) 千僧3丁目

南側を西国街道が通る。南西が集落部。西善寺(浄土宗本願寺派)がある。昭和44年に自衛隊の中にあつた墓がこの東に移転された。また、西国街道沿いに地蔵堂があつた。高地のため、植木や苗木づくりが行われたり、大根等の野菜が植えられていた。渇水期の田には水車が必要であつた。又、この地は東にあつた「籠池」の水引であつた。耕地整理により、北から北東にかけての半分が「字池西」となつた。

9. 出口(でぐち) 千僧2・5丁目

北側を西国街道が通り、その北西沿いに宅地があり集落の中心部分を成している。位置的に、集落の東・南の出入り口に当たる。今池の東側丸田の一部・出口・高町・越塚・船原を通る水路を「勘兵川」という。

10. 東口(ひがしのくち) 千僧3・4丁目 桜ヶ丘3丁目

名のとおり当地区の東にある。大鹿地区の飛び地「籠池ノ下」が2ヶ所ある。また、大鹿へ飛び地があつたが、桜ヶ丘の耕地整理により編入されたため、以後は見当たらない。農地あり、水稻増産地であつた。現在は住宅地となっている。

11. 船原(ふなはら・ふなばら) 千僧4丁目

南西で伊丹地区・大鹿地区と接している。地内に伊丹の飛び地「一ツ橋」、大鹿の飛び地「船原」があり、反対に伊丹に飛び地を持つ。(西台の耕地整理により伊丹へ編入)現在は、この地区の東側に県道昆陽池・緑地線(五合橋線)が走っており、ニチリン化学などの工場もあり、水稻増産地の面影はない。

12. 越前(こしまえ) 千僧4丁目 行基町4・5丁目

北側半分は医薬品の開発・製造会社になっている。水稻増産地であり、年貢代は一石7~8升であつた。

13. 樋掛田(ひかけだ) 行基町1丁目

南西で伊丹と接する。湿地帯であつたが水稻増産地であり、年貢代は一石7~8升であつた。

14. 野末(のずえ) 鈴原町3・4・7丁目 行基町2丁目

当地区の南端にあり、伊丹と昆陽に挟まれている。さらに南に4ヶ所飛び地がある。現在は公務員宿舎がある。昆陽大池の中心部今池の西側の一つ樋の流水は武庫川からの井川(昆陽井)と合流し、この付近の農地を潤し、さらに御願塚へ流れる。昆陽井の清掃等の日役は、下流の分水に応じ、毎年人夫を出した。人員割は昆陽村長および各役員が采配した。寺本・山田・野間・堀池・御願塚村の人夫は土間で仕事の割振りを伝え聞く。昆陽村領の領高は650石で昆陽集会場を建てた。

※伊丹市寺本に「野末」がある。14ヶ所の飛び地のみである。「野添」は昆陽と荻野にある。

15. 北垣内(きたかきうち)

今池中央部の西岸から、村の中央部に広がる地域で、全域が畑で大根、さつまいも等が植えられていた。また、昆陽の飛び地「牛並戸」を4ヶ所所有する。耕地整理により、171号線以北は「広畑」、以南は「長円」になり、この地名は大部分が消えてしまった。

16. 廣畑(ひろはた) 広畑2から4丁目

もともとは昆陽池の南東部にあり、ほとんどが、その名の通り畑で、櫛で梳いたような地区である。また、南西の大部分は昆陽地区の飛び地「牛並戸」である。この地区を含め171号線以北は宅地造成により、「広畑」となったが、もとは小さな部分であった。

17. 中畑(なかはた)

当地区の最も北にあり、縦に長い地区で、地区に昆陽の飛び地3ヶ所所有する。特記すべきは、北側に水路が伸びており、これが西に昆陽、東に大鹿地区の境となっている。その水路の西には松林があり、現在も残っている。この地区も耕地整理により「広畑」および「田畑」となった。現在は市交通局・千僧自衛隊となっている。

18. 宮ノ西(みやのにし)

地名のとおり、当該地区の東(池ノ上)に千僧東神社があった。一部に農地があるが、殆どが畑で柿、桃、みかんが作られ、さらに、竹藪があり、各野菜のさし木に使った。中央部に「開墾地」がある。昆陽の飛び地あり。此の地は耕地整理により、「長円」「池西」「籠池」の3つになった。

19. 長圓・長円(ちょうえん・ながえん) 千僧1・2丁目

もともとは現在の地域の東より、北に伸びる縦長の地域で耕地整理により形が変わって残っている。一部は「田畑」「広畑」となったが、全域が畑で、昆陽の飛び地2ヶ所あり。地番・場所は不明であるが、一反程度の「伊勢講田」があったが、農地解放により無くなった。

20. 田畑(たばた) 広畑1丁目

ほぼ全域が畑で、植木・果物では、ミカン・柿・桃・梅があり、綿も栽培され、これで着物も作った。耕地整理され、大鹿地区の一部をも含み地域が広がった。その殆どが千僧自衛隊である。昆陽の飛び地2ヶ所あり。また、2歩(坪)ほどのため池あり。

21. 山ノ北(やまのきた)

ほぼ全域が畑で、大根その他の野菜を作っていた。南東に墓地・火葬場があった。この地域もほぼ全域が耕地整理により、前述の「田畑」となった。その後自衛隊の設置により、第3師団・千僧駐屯地となる。また、昭和44年に墓は「水掻」地内の西善寺の東に移転された。この地名「やま」とは「猪名野山願成就寺安楽院」「今籠山西善寺」などの「山号」であろう。(例 荒牧字山道・寺本字山道・南野字山道・堀池字片山)

22. 新開畑(しんかいはた)

ほぼ全域が畑で、この地区の畑は狭いものが多い。大根その他野菜、ミカン・柿・桃・梅そして庭木を栽培していた。この地区も耕地整理され大部分「籠池」で、一部「池西」「田畑」等になっており、現在はその大部分が国道171号線南の自衛隊グラウンド敷地となっている。

23. 池ノ上(いけのうえ) 千僧3丁目

西に安楽院があり、その北に猪名神社(千僧東神社)があった。しかし明治43年9月15日

「命令により」現在の天神社(西の神社)に合祀された。南東に少し松林があり、その他は全部畑である。(松・野菜・梅・桃・綿)「池ノ上樋門」があり、勘兵川に送るのに水車を踏んだ。西に籠池があったところから、「池ノ上」としたのだろう。なお、この地も耕地整理され、ほとんど「池西」および「籠池」になったが、安楽院のみが「池ノ上」として残された。

※安楽院

千僧村にある真言宗御室派に仁和寺末に属する蘭若にして、山号を猪名野山と称し、寺号を願成就寺といい、元来昆陽寺塔頭の一院たりしも後、仁和寺末となりしものなり。

即ち摂陽群談に。「願成就寺」

千僧村ニアリ山号猪名野山安楽院ト称ス。聖武天皇御宇天平中菩薩僧行基五畿内ニ於テ四十九院ヲ草創ス於示是願已成レリ因ツテ願成就寺ト号ス本尊毘首羯摩手造ノ弥陀郡内尼崎大物浦ニ漂流シテ行基是ヲ得玉フノ尊像也一千ノ僧供養ヲ以テ千僧ノ地名アリ

とあるもの是にて右に依れば行基が四十九院建立の最後に成就せるものをいう、又当院成就せるが故に一千の僧侶を集めて供養を修したる如く記せるを以て、千僧村の起源に種々の異説起こるも、千僧供養ありしは元明帝の和同六年勅願に依り行われしものなれば、本院の創立より20余年前に属し何等の関係無き事村名起源中に記するが如し。

(川辺郡誌より)

24. 今池(いまいけ) 千僧1丁目・広畑6丁目

名のとおり千僧池で、昆陽池の南に隣接していた。現在伊丹市の浄水場および国道、市役所、博物館、図書館、公民館などとなっている所を含み、その西に一部を残す。「長靴型」をした池であった。農作物・耕作物用溜池である。池の真ん中は浅く、人が立つことができたので、大干ばつときは池の真ん中で「雨乞い」をした。行基菩薩が開祖とあるが、西国に行く人夫が病気になったのを行基菩薩が助けたという。長尾村山本郷が沈没し、段々に荒牧・鴻池・中野・今池が陥没し水田稲作を行った。令和期にはさらに埋め立てがすすみ、市施設が拡張予定。

25. 籠池(かごいけ・かんどいけ) 千僧3丁目

名のとおり池であった。大鹿地区からの水をうけ、深さは2mくらいで池床が岩石、砂利で水持ちが悪く長く留まっていない、一晩で抜けてしまうほどであるので、西側の高地では、水車で流水をした。毎年1回「池干し」をし、コイ・フナ・モロコ等の魚を獲った。池の西に水番があった。昔は安楽院の庭園であったとか、上記のように水が溜まらないので、村長ら村の役員が売却し、その金で千僧口より千僧へ入る道を作ったといわれている。「池ノ上」「宮ノ西」「新開畑」「山ノ北」および隣接していた「大鹿字西ノ口」の地域の一部が、耕地整理後この区域となり、「字」として扱われ、大きくなった。現在は全部が自衛隊の敷地となっている。この池に大鹿村の水利があったのか、この池の南(下流)に「大鹿字籠池ノ下」の飛び地が数か所見られる。

※この池は大鹿村の用水路であったとされているのに、なぜ、千僧になったのであろうか？この疑問は「籠池ノ下」にも続く。

26. 池西(いけにし) 千僧2・3丁目

「池ノ上」「宮ノ西」「水搔」の一部が、耕地整理により、新しくできた地名である。籠池の西にあたることから付けられたものである。

昭和5年(1930)小説家・梶井基次郎が伊丹市堀越町(清水町2丁目)より千僧字池ノ上(池西)へ転居する。

27. 籠池ノ下(かごいけのした・かんごいけのした) 千僧4丁目

籠池の「モレ水」で耕作ができた。自衛隊第三師団ができて、一時期耕作は悪くなったが、水路が出来て、良くなった。明治の地籍図にはこの土地の記載は無いのに、なぜ、千僧の地域となっているのか、大鹿村にはこの地名があり、大鹿の村域であったと考えられる。大鹿の図面が現存しないので不明である。「大鹿字桜ヶ丘」の耕地整理時期に交換したものではないだろうか。「大鹿字桜ヶ丘」に飛び地「字東口」が無くなっている。この地域の西の「字東口」に大鹿の飛び地「籠池ノ下」が二か所ある。

28. 一ツ橋(ひとつばし) 千僧4丁目

この地も同じく、明治の地籍図に記載は無い。前述の「字 船原」地区への飛び地が、当地区に(交換)編入されたものではないだろうか? 図面には元伊丹町飛び地とある。

千僧村の年中行事 (岸本利三郎氏より聞き取り)

1月1日	年越しそばで除夜の鐘を聞き「初詣」、ご先祖様と神社仏閣へ、家族一同、一年の無病息災をおいのりする。午前9時頃より、味噌仕立てのお雑煮で御祝善につく。その後、子・孫にお年玉を渡す。
1月7日	草粥で祝う
1月14日	御日待前年度になった細縄を各家から90m位の長さのものを出し、東西に分かれ綱引きを行う。勝ったほうが豊年となる。
1月15日	夜明けから安楽院が守る「火」を受け、集会所で絶やさないようにし、神社に組んである大トントに火をつけ、古い御札と神棚を燃やし、また、本年の健康を願う。(宮当番の3名で行う)
2月2日 または3日 (節分)	高野講と愛宕講では、地主全員と自作農の5名とで御祭精進で会食する。伊勢講では、地主順番制の3名が、御祭りをする。自作農も順番制となる。経費は講田の収入をもってし、かしわ料理・野菜食となる。
3月	馬鈴薯の種植えと夏野菜地の手入れ
4月	村の代参が伊勢神宮へ詣り、お札・お守りを受け各家へ(2名)
5月	愛宕神社へ代参、お札・お守りを受け各家へ(廻番で2名)
6月中頃すぎ	早生の田植え、順次中生、晩生へ、7月末まで
7月	草取り、一番草取り七日間を4回行う。暑い時期なので11時から13時までは休憩して疲れを癒す。「時を伝えるため」小使夫婦が、小太鼓合図した。
8月(お盆)	先祖様の祭り
12日	昆陽寺へ詣り オガラを2本買って、お供えの時、「おはぎ」の御箸にした。
13日から 15日	午前中祭り。午後、昆陽川へ流す。

9月	大風のための被害とヒエ刈りを行い管理する。
10月中旬より	早生刈り、後、エンドウ、そら豆等の野菜を植える。
25日(秋祭)	ご祝儀をもらい、翌日に慰労会を行う。(消防団・青年団)
11月	中生・晩生の稲刈り。15日後、稲こぎ、石臼に上り牛に引かせる。
12月	生産米年貢の支払い交渉を行う。統一年貢協定とするが、平年作・多少の不作地・肥料・台風による不可抗力などの不作地は個々に話し合う。

(文責：足立繁)